

三加和町文化財調査報告 第16集

田中城跡

XV

2000

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会

田中城跡

XV

2000

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会



全景（南より）



調査区全景

序

今年度は、昭和63年度以来、久し振りに主郭部周辺にある曲輪の調査を行いました。

前回は、五筆に分かれているうち東側の一筆の調査を行い、主郭を取巻くように掘られた空堀や野鍛冶を思わせるガチガチに固まった焼土が埋土の土壌などが確認されました。今年度調査を行った南側の曲輪は、『辺春・和仁仕寄陣取図』によると辺春氏が陣を張っていたと思われる箇所にあたり、辺春氏の陣取りの様子が解明できればという期待が持たれました。

結果は、多数の柱穴が確認されましたが、平場の半分程しか調査を行わなかったため、陣跡を推定できるような柱穴の並びまでは確認できませんでした。しかし、平場の半分から土色が異なっており、外側は明らかに整地を行って広げていることが推定され、築城の一端がうかがえました。また、詳細はまだ不明ですが、ガラスの小玉が出土し、新たな研究材料となることでしょう。

毎年、新たな遺構・遺物の発見があり、興味が尽きることはありません。今後も発掘成果に大いに期待が持たれますので、関係諸庁・機関および地元の皆様のこれまで以上のご協力をお願い致します。

平成12年 3 月

三加和町教育長 高 木 瑞 穂

例 言

1. 本書は熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、平成11年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫・県費補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物及び遺構の実測・製図・拓本・写真撮影は黒田が行った。
4. 調査の方法・遺物に関しては、専門調査委員のご教示を得た。
5. 出土遺物は、三加和町教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆・編集は黒田が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 序 説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査経過	2
第Ⅱ章 調査の成果	6
第1節 調査の概要	6
第2節 遺構と遺物	9
1. 検出遺構	9
[I 区]	9
(1) 柱穴	9
(2) 土壌	9
① 1号土壌 (SK-01)	9
② 2号土壌 (SK-02)	9
③ 1号不定形土壌 (SX-01)	9
[Ⅱ 区]	9
(1) 掘立柱建物跡	9
① 1号掘立柱建物跡 (SB-01) ?	9
(2) やぐら跡	13
(3) 不定形土壌	13
① 1号不定形土壌 (SX-01)	13
② 2号不定形土壌 (SX-02)	13
③ 3号不定形土壌 (SX-03)	13
④ 4号不定形土壌 (SX-04)	13
2. 出土遺物	16
(1) 陶磁器類	16
(2) 鉄砲玉	19
(3) 土錘	19
(4) ガラス玉	23
第Ⅲ章 まとめ	24
報告書抄録	33

挿 図 目 次

第1図	田中城跡全体図	2
第2図	遺構配置図	5
第3図	1号土塙実測図	10
第4図	2号土塙実測図	11
第5図	1号不定形土塙実測図	12
第6図	1号掘立柱建物跡実測図	14
第7図	やぐら跡実測図	15
第8図	出土遺物実測図Ⅰ	17
第9図	出土遺物実測図Ⅱ	18
第10図	土錘実測図Ⅰ	21
第11図	土錘実測図Ⅱ	22
第12図	ガラス玉実測図	23

表 目 次

第1表	土錘計測表Ⅰ	19
第2表	土錘計測表Ⅱ	20

写 真 図 版 目 次

図版1	(1) 調査前状況（北西より）	(2) 調査前状況（南東より）
図版2	(1) I区遺構検出状況（東より）	(2) I区遺構発掘状況（東より）
図版3	(1) II区遺構検出状況（北西より）	(2) II区遺構発掘状況（北西より）
図版4	(1) 『辺春・和仁仕寄陣取図』部分図	(2) II区建物跡（北より）
	(3) やぐら跡（北より）	
図版5	遺物出土状況	
図版6	(1) ガラス玉	(2) ガラス玉
	(3) 鉄砲玉	

第 I 章 序 説

第 1 節 調査に至る経過

昭和61年度に主郭の調査を行って以来、14年目の調査となった。その間には、掘立柱建物跡のほか大土木工事を窺わせる空堀、最近何かと話題の連棟式建物跡、竈、やぐら跡など様々な遺構の発見があり、遺物も青磁・白磁・染付などの輸入陶磁器類、すり鉢・火舎・土師器などの日常生活用品、兜の前立・鎧の小札・刀子・鉄砲玉など武器・武具類のほか石臼、天目茶碗など多種多様なものが出土している。

調査は、平成元年に山口県立文書館で『辺春・和仁仕寄陣取図』が発見されたことにより、城の西側を中心に調査を進めてきたが、平成9年度の専門調査委員会の際に、もう少し面として田中城の遺構がとらえられるような調査を実施して欲しいとの指摘があったため、再び主郭周辺の曲輪から調査を行うこととした。主郭周囲の曲輪は現況では五筆にわかれており、東側の一筆だけは昭和63年度に調査を行い、焼土がピッシリと詰まり小鍛冶を思わせる土壌や堀などが確認されている。

今年度調査を行った南側は、『辺春・和仁仕寄陣取図』によると辺春氏が陣を張っていたと思われ、以前、地権者が耕作中に炭化米を掘り出したという場所に当たる。そのため辺春氏の陣や米倉などの建物跡を想定して調査を開始した。

第 2 節 調査組織

調査主体	三加和町教育委員会
調査責任者	今村 憲夫（教育長：平成11年9月まで） 高木 瑞穂（教育長：平成11年10月から）
調査事務	小山 暁（社会教育課課長） 鍋島 忠隆（社会教育課主事）
調査員	黒田 裕司（社会教育課参事）
専門調査委員	石井 進（東京大学名誉教授） 大三輪龍彦（鶴見大学文学部教授） 田邊 哲夫（玉名市立歴史博物館館長） 北野 隆（熊本大学工学部教授） 服部 英雄（九州大学教授） 隈 昭志（山鹿市立博物館館長）

大田 幸博（熊本県文化課主幹）

発掘作業員 靄 浅代・靄 邦代・靄サカエ・小山美佐子・高木アヤ子・高木久代

調査協力者 中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長）

第3節 調査経過

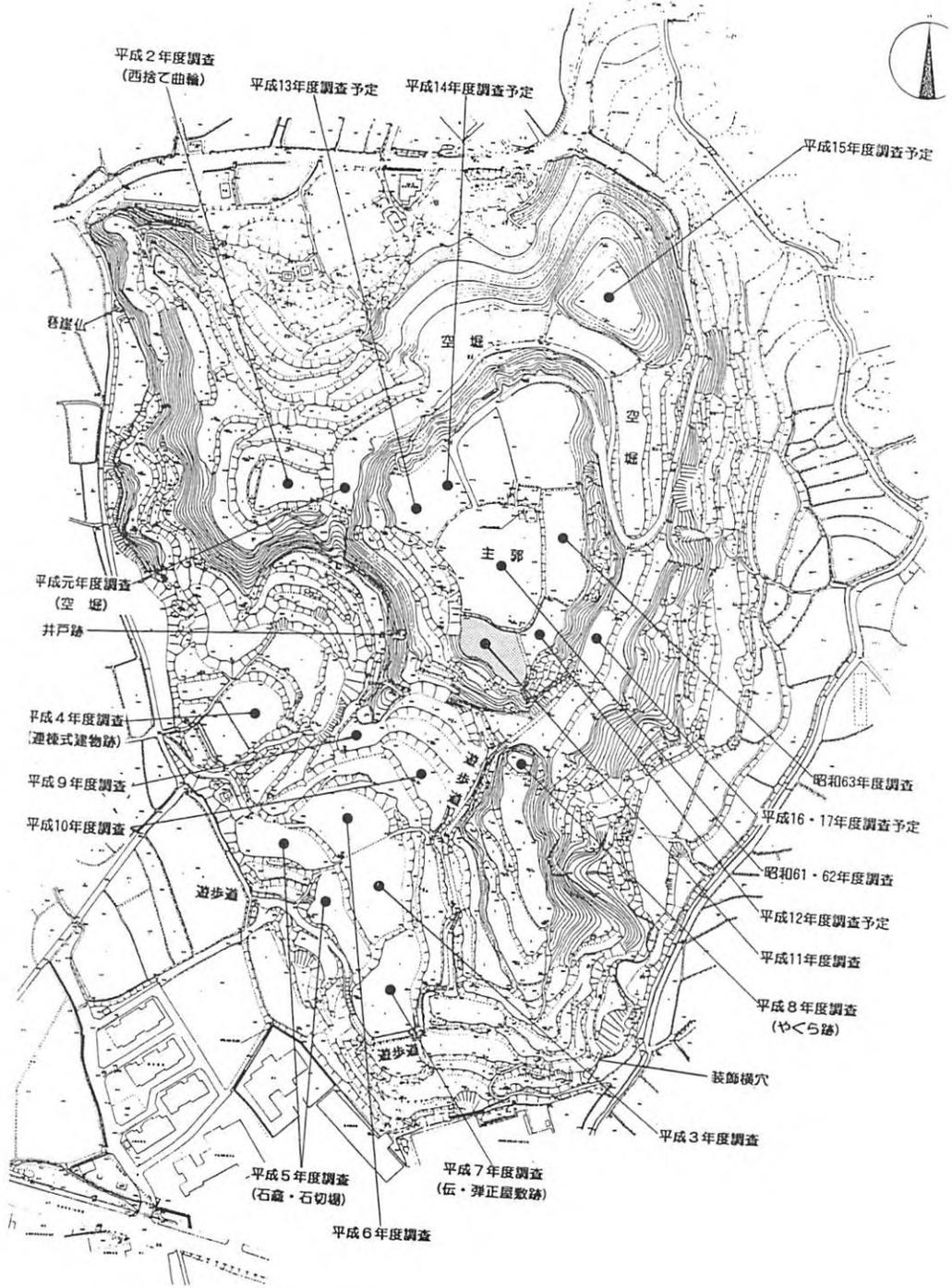
- 5月27日 西鉄バス「郷土史探訪バス」(30名)。
- 6月8日 河内町文芸協会見学(32名)。
- 9月1日 調査開始予定だったが、雨のため明日からに延期。
- 2日 作業開始。
調査区は芝張り整備が行われていたため、芝剥ぎから始める。芝と旧表土間に山砂を入れてあったため、そこまでを剥ぐことにする。
- 7日 プレハブ建設。
- 20日 調査区の南側部分には、山砂の下に約50cmも埋土がしてあるようで、これの除去にかなり時間がかかりそうである。
- 24日 台風18号が熊本県に上陸。桜の木が多数折れる。
- 29日 ようやく埋土の除去を終わり、本来の表土剥ぎにかかれることになる。
- 30日 青磁・染付など、城関係の遺物が出土しだす。
- 10月8日 北西側約1/4の表土剥ぎを終え、地山が出だす。柱穴と思われるものも確認された。
鉛製鉄砲玉が2コ出土。大きさはこれまでのうち最小で、1コは潰れている。
- 12日 青磁・白磁・染付などのほか、土錘が2コ出土。
- 13日 鉄砲玉1コ、土錘2コが出土。
- 14日 柱穴・土壙と思われるものが数ヶ所見られる。
- 15日 土錘が1コ出土。今年度は、土錘の出土が多いようだ。
- 18日 6コ目の土錘が出土。青磁片などやや大きめの破片も出土。
- 19日 さらに土錘が2コ出土。
- 20日 ようやく表土剥ぎを終え、遺構確認を始める。柱穴などありそうだが、南側では地山の確認ができない状態である。
- 21日 北側半分から地山が確認されたため、この部分の遺構検出を始める。柱穴・土壙と思われるものが確認されたが、まだ若干の濁りがあるため、もう少し掘り下げてみることにする。南側半分も同レベルまで表土を剥いたが地山の確認はできず、落ち込んでいる可能性がある。

- 22日 ガラス玉と思われる小玉が1コ出土。古墳の副葬品とよく似ているように
思われ、確認の必要があるようだ。
- 24日 三加和町青年団ウォークラリー（約120名）。
- 25日 土錘2コ出土。陶器類よりも土師器の割合が多くなったように思われる。
- 26日 土錘3コ出土。13コ目となる。
- 11月4日 熊本市清水町婦人学級生見学（45名）。
- 10日 遺構写真撮影の準備を行う。土壇2基、不定形土壇1基と柱穴が検出され
たが、建物跡を想定できるような並びは確認できない。
- 11日 遺構・遺物写真撮影。遺構の発掘にかかる。
土壇には焼土が多量に含まれている。
- 19日 熊本市立博物館考古学講座受講生見学（40名）。
- 22日 遺構発掘写真撮影。
- 24日 ガラス玉1コ出土。土壇実測。
小さな玉のため、排土をふるいにかけて探すことにする。
- 12月2日 ガラス玉1コ出土。
- 4日 空中写真撮影。
- 6日 調査区の東側と中央部にトレンチを入れて、地山が確認できなかった部分
の土層を確認することとする。
東側トレンチ（Iトレ）から、白磁・土師器・土錘などの小片のほかガラ
ス玉1コも出土。
- 9日 中央トレンチ（IIトレ）からも、陶器類・土師器・土錘のほかガラス玉も
1コ出土。
- 10日 埋め戻しにかかる。
- 22日 芝張りの際の埋土がかなり入っていたため、予想以上に時間がかかってし
まい、当初予定していた一筆分の調査完了は無理となった。そのため残り
100㎡程（II区）を調査し、ほかは次年度に持ち越しすることにする。
II区の表土剥ぎを始める。

平成12年

- 1月6日 調査再開。
- 11日 埋土の中に多量の礫が混ざっていたため、除去に手間取る。
- 19日 表土中より鉄砲玉1コ出土。I区で出土したものよりは一回り大きく、ズッ
シリと重量感がある。

- 20日 全面で地山と思われる土が確認され、柱穴も確認されるようになった。
- 28日 調査区全面から柱穴が確認される。
- 2月2日 鉄砲玉1コ出土。通算45コとなる。
遺構を掘り始める。
- 11日 「戦国肥後国衆まつり」見学者が多数訪れる。
- 16日 菊池市ふるさと学級見学（約100名）。
- 17日 大分県佐賀関町教育委員会視察（6名）。
- 22日 宮崎県木城町教育委員会視察（6名）。
空中写真撮影。埋め戻し開始。
- 3月2日 埋め戻し終了。
- 22日 専門調査委員会を開催。



第1図 田中城跡全体図

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

主郭周囲の曲輪は、平成4年度事業としてすでに芝張り・駐車場として整備を終えていたが、雑草がかなり入り込んできていたため調査を行うこととした。

今年度の調査区は主郭周囲に形成された曲輪のうち、南側の「L」字状に曲っている曲輪で、排土場など作業段取りを考え、三分割して調査を行うことし、西側から調査を開始した。

調査は、芝剥ぎのあと例年どおり人力による表土剥ぎから始めたが、作業を進めていくと芝の下に山砂が5～10cmあり、さらに外部から土を持ち込んで整地されていることがわかった。この土はガチガチに固まっており、本来の表土に達するまでにかかなりの時間を費やしてしまい、予定が大幅に狂ってしまう結果になった。深いところでは約50cm、この持込み土を除去すると主郭側約三分の一からは白っぽい地山が現れ、外側三分の二は埋土と思われる暗褐色土が確認された。この面で精査を行っていくと土壙と多数の柱穴が見つかり、また、多数の陶磁器類のほか鉛製の鉄砲玉やガラス玉などが出土した。しかし、建物跡となるような柱穴の並びを確認するまでには至らなかった。一方、土壙の1基の埋土には焼土が多量に含まれていた。

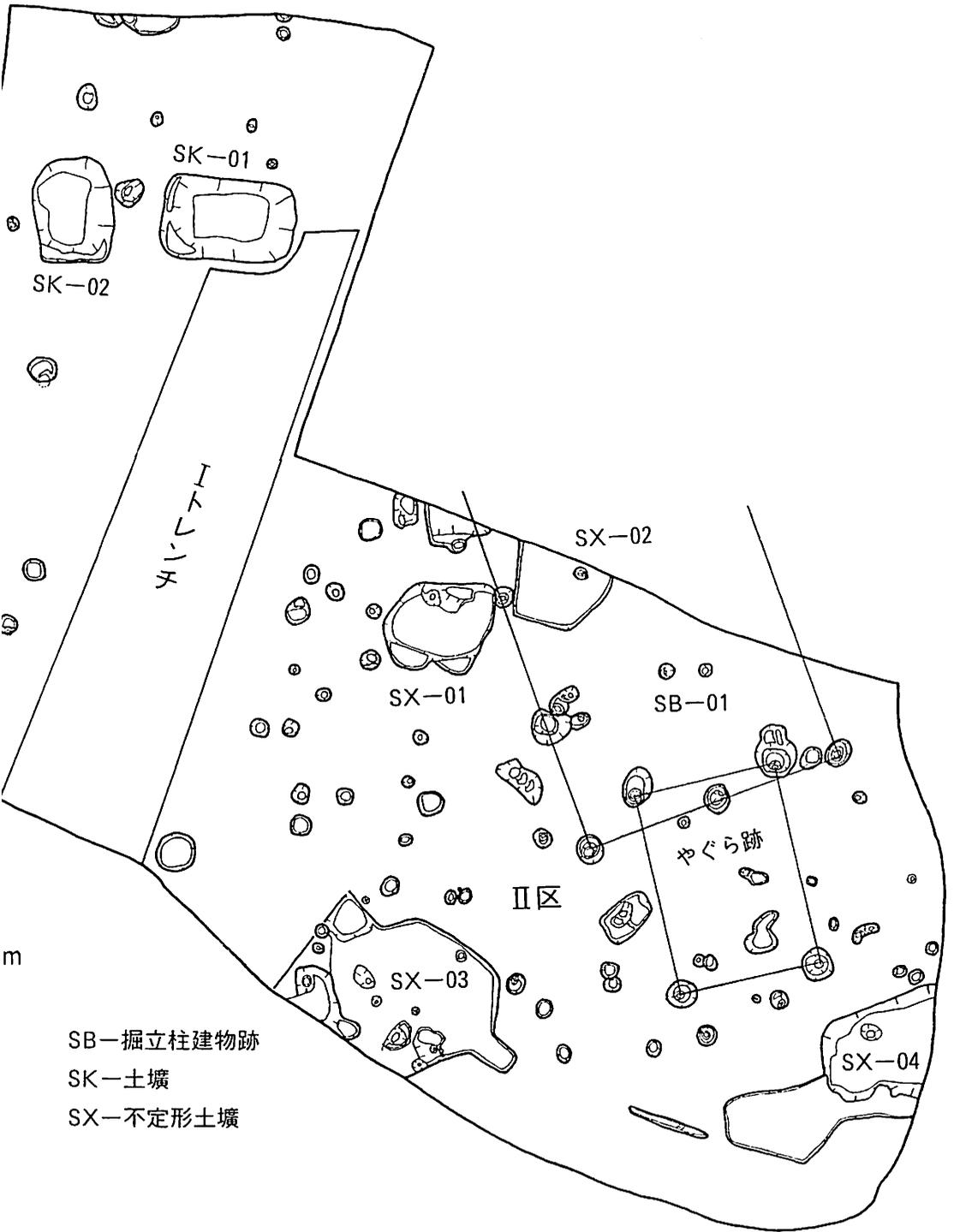
その後、東側に約100㎡調査区を拡大したため、仮に、前の部分をⅠ区、拡大部をⅡ区とすることにした。

Ⅱ区もⅠ区同様、ガチガチに固まった土が深いところで約70cm入れられており、さらに礫も含まれていたためⅠ区以上に手間取ってしまった。本来の表土まで掘り下げるとⅠ区の主郭側で確認された白っぽい地山が全面に広がっており、精査すると、全面から多数の柱穴が確認された。並びを検討したところ、東側の中央部で一柱間×一柱間の「やぐら」様の並びが確認され、その北側からは次年度調査予定区に延びていると思われるため全容は不明だが、2柱間×2+α柱間の掘立柱建物跡と思われる並びが確認された。遺物は、Ⅰ区同様、多数の陶磁器類のほか、鉛製の鉄砲玉3個やガラス製の小玉が出土した。

今年度調査区には予想していなかった持込みの埋土があり、予定区間の調査を終えることができなかつたため、次年度に継続することになった。そのため、トレンチを入れて次年度調査区の状況を確認してみたが、今年度のように深くないことが判明したため、例年どおり人力により表土を剥ぐこととした。



第 2 図 遺構配置図



第2節 遺構と遺物

1. 検出遺構

[I 区]

(1) 柱 穴

調査区の全面から確認された。直線的に繋がるものはあるが、構築物を想定させるような並びを確認するまでには至らなかった。

20～30cm前後とあまり大きくないが、深さが50cmを越えるものが多く見られる。

(2) 土 塙

遺構確認面である白っぽい土（主郭側三分の一）と暗褐色土の境部分で、調査区の東側に土塙二基と不定形土塙一基が並んで確認された。

① 1号土塙（SK-01・第3図）

長径1.96m×短径1.17mのほぼ長方形プランで、深さは79cm。埋土中からすり鉢や白磁片などが出土。南西側四分の一には、上部から投げ込まれたような状態でガチガチに固まった焼土が約15cmの厚さで確認されている。

② 2号土塙（SK-02・第4図）

南側は直線的だが、北側は丸味をもった砲弾型プランで長径1.46m×短径1.13m、深さは55cm。南側で焼土が確認された。

③ 1号不定形土塙（SX-01・第5図）

主郭部へ上がる通路の下から確認されたため全体は不明だが、長径3.02m×短径1.31+ α mの不定形である。深く掘られている箇所が二ヶ所あり、東側は66cm、西側は44cm。埋土中から多数の遺物が出土したが、他の二基と比べると時期的にも新しいと思われる。

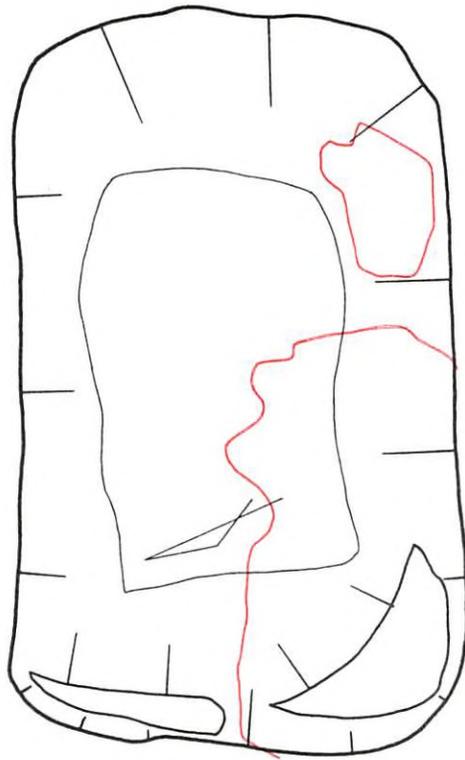
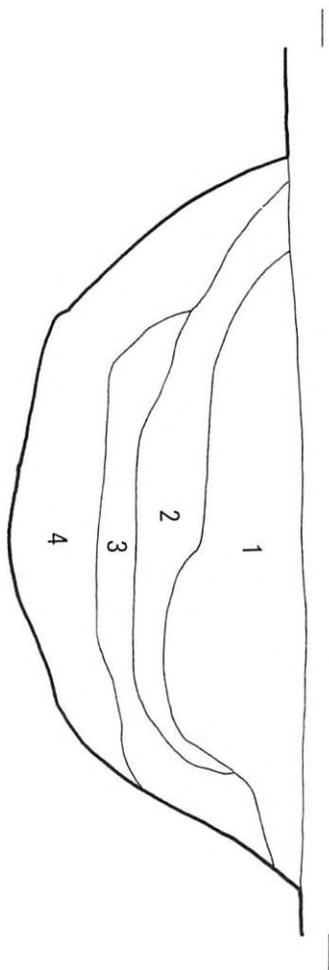
[II 区]

I区同様、調査区の全面から多数の柱穴が確認された。調査区は、『辺春・和仁仕寄陣取図』によると辺春氏が陣を張っていたのではないかとされる地域にあたり、また、以前地権者が耕作中に多量の炭化米を掘り出したという場所でもあるため、何らかの構築物が多数確認されると思われたが、掘立柱建物跡と思われるものとやぐら跡ではないかと思われるものが各1棟確認されただけであった。ただし、掘立柱建物跡と思われるものは未調査区に延びていると思われるため、断定できるのは次年度を待たねばならない。

(1) 掘立柱建物跡

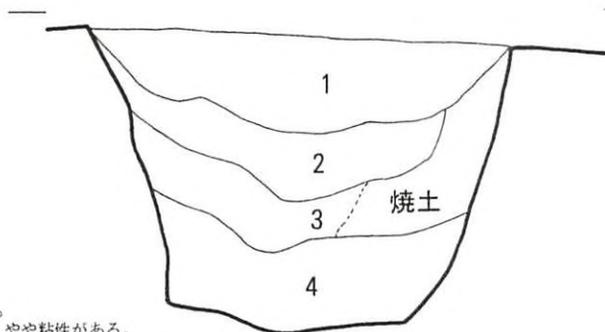
① 1号掘立柱建物跡？（SB-01・第6図）

北東側で確認された掘立柱建物跡と思われる柱穴の並びで、桁行二柱間×梁行二柱間が確認されており、北側（来年度調査予定地）へ延びていると思われるため、桁行はもう少し延びる可能性がある。柱間の寸法は西側桁行P₁～P₂～P₃が1.95m・1.95m、梁

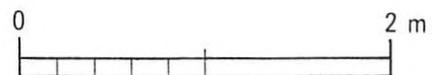


赤色 - 焼土

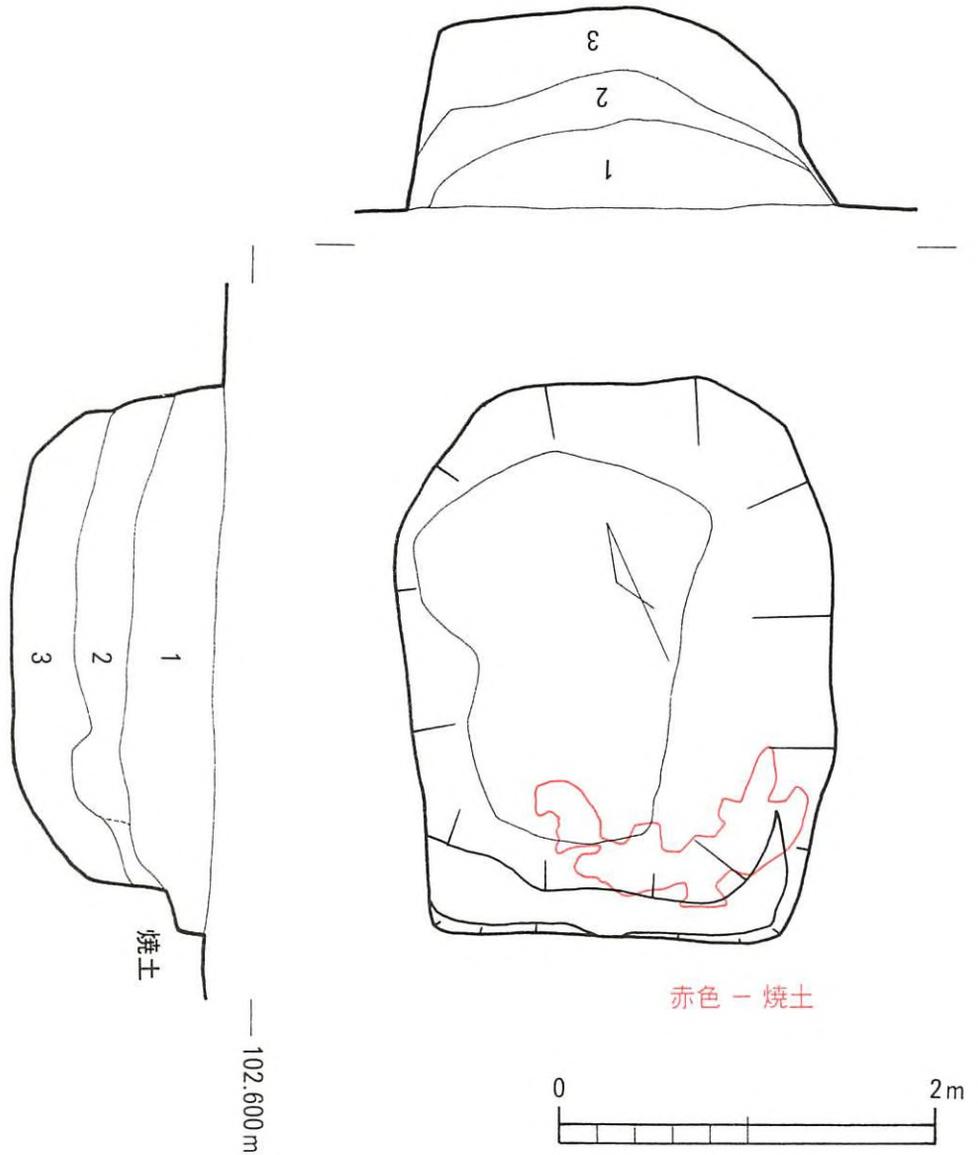
— 102.600 m



- 1 - 暗褐色。焼土・炭化物を含み、よく締まっている。
- 2 - 暗褐色+白色（地山の土）。焼土・炭化物を含み、やや粘性がある。
- 3 - 暗褐色+赤褐色（焼土の塊）。焼土塊を多量に含み、ガチガチに締まっている。炭化物も含む。
- 4 - 黒褐色。焼土・炭化物を若干含む。

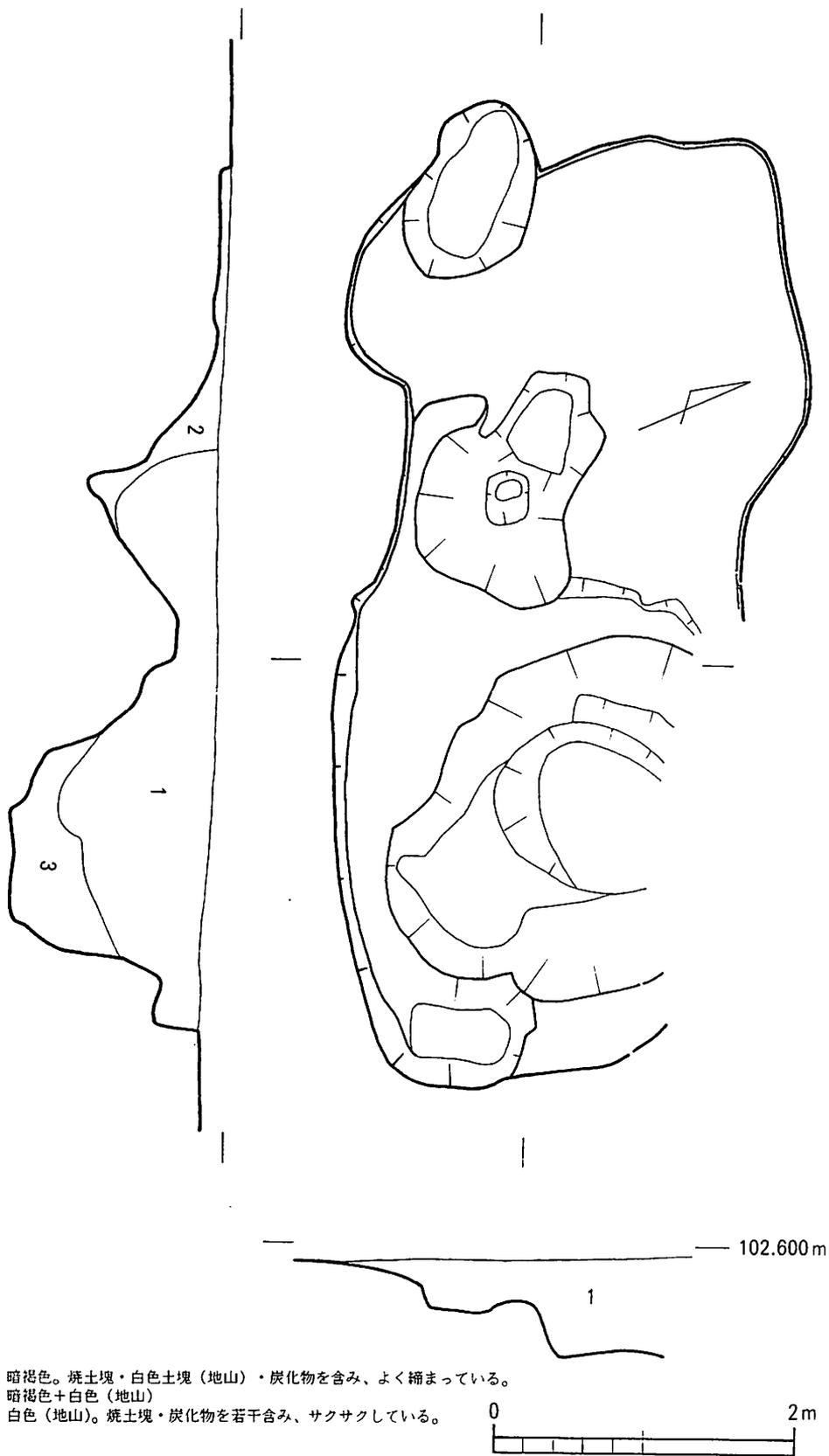


第3図 1号土壤実測図

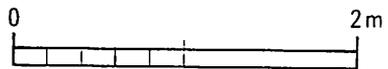


- 1 - 暗褐色。焼土・炭化物の小片を含み、よく締まっている。
- 2 - 暗褐色+赤褐色（焼土の塊）。焼土塊を多量に含む。炭化物も若干含み、よく締まっている。
- 3 - 黒褐色。焼土塊・炭化物の小片を若干含む。

第4図 2号土坑（SK-02）実測図



- 1 - 暗褐色。焼土塊・白色土塊（地山）・炭化物を含み、よく締まっている。
- 2 - 暗褐色+白色（地山）
- 3 - 白色（地山）。焼土塊・炭化物を若干含み、サクサクしている。



第5図 1号不定形土壌実測図

行 $P_3 \sim P_4 \sim P_5$ が $2.00\text{m} \cdot 1.87\text{m}$ とほぼ一定しており、かなり規則的に作られた建物になるのではなかろうか。柱穴の大きさは、 P_2 が最大で $57.0 \times 55.0\text{cm}$ 、 P_1 が最小で $32.0 \times 25.0\text{cm}$ で平均 $42.6 \times 37.4\text{cm}$ と割と大きめである。柱穴の深さは、 P_2 が最深で 84.0cm 、 P_3 と P_5 が最浅で 71.0cm 、平均 74.2cm である。大きさも深さもしっかりしており建物跡を想定しても良さそうである。

しかし、前述したように来年度調査予定地に延びていると思われるため、詳細については来年度の調査を待たねばならない。

(2) やぐら跡 (第7図)

1号掘立柱建物跡?と切り合って確認された一柱間×一柱間の建物跡で、 $P_1 \sim P_2$ と $P_3 \sim P_4$ は 3.03m 、 $P_2 \sim P_3$ と $P_4 \sim P_1$ は 2.1m の長方形。柱穴の大きさは P_4 が最大で $80.0 \times 63.0\text{cm}$ 、 P_2 が最小で $47.0 \times 45.0\text{cm}$ で平均 $59.5 \times 48.25\text{cm}$ 。深さは P_3 が最深で 75.0cm 、 P_1 と P_2 が最浅で 55.0cm 、平均 61.75cm である。この柱穴からどれ程のやぐらが建てられるのかは分からないが、他の柱穴と比較すると大きくて深いため、『辺春・和仁仕寄陣取図』に描かれている辺春陣の「やぐら」跡の可能性も考えられる。

(3) 不定形土壇

狭い調査区だったが、柱穴に混じって四基の不定形土壇が確認された。うち三基は調査区外に延びているため詳細については不明。

① 1号不定形土壇 (SX-01)

約 $1.4 \times 1.6\text{m}$ の方形に近い形状をしており、深さは約 60cm もある。埋土は全体的に焼土・炭化物を含み、特に表土近くは多量に含んで固く締まっている。土師器片のほか、青磁や白磁の小片も出土。

② 2号不定形土壇 (SX-02)

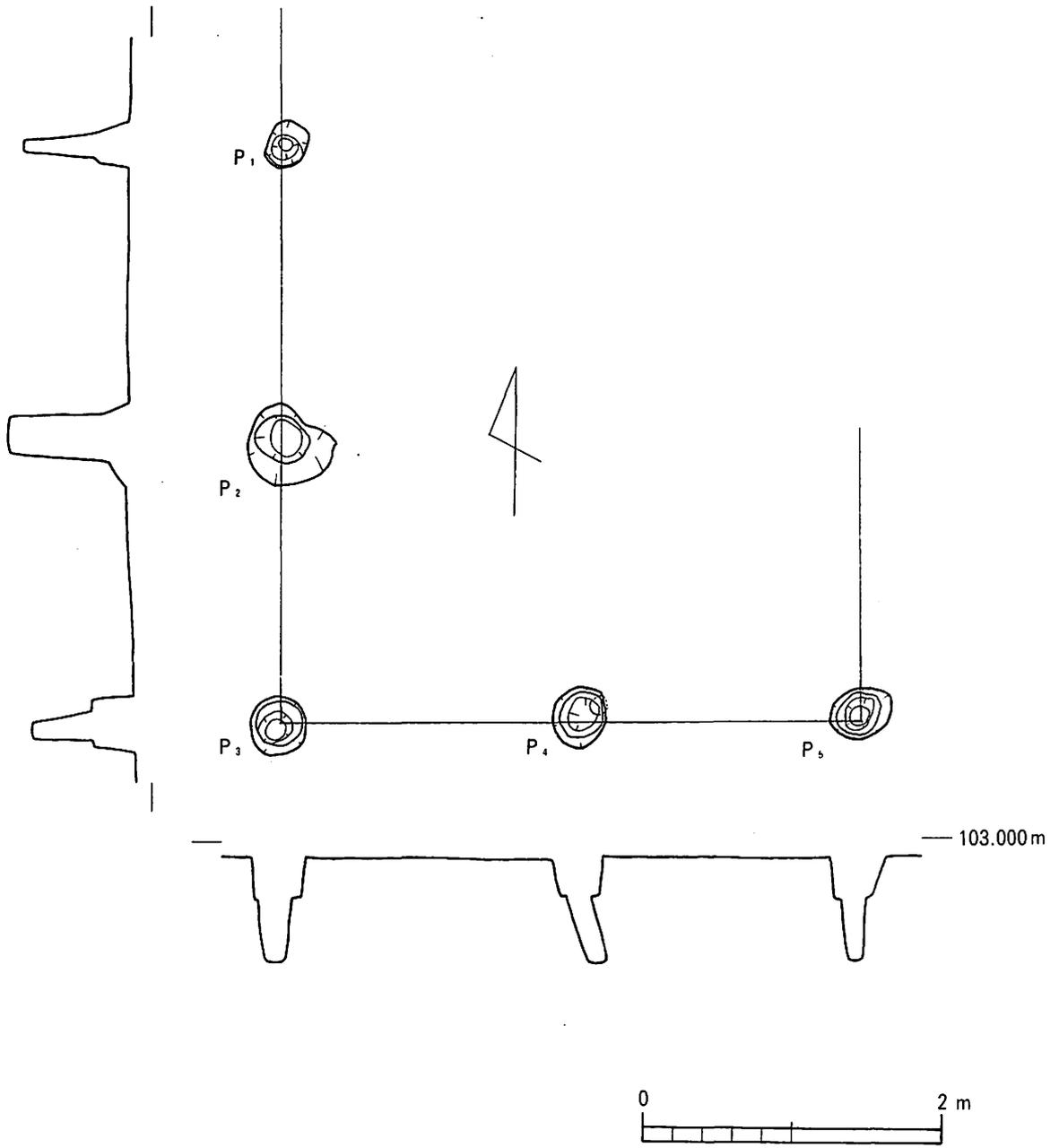
1号の東側で検出され、半分は調査区外に延びている。約 $0.9 \times 1.05\text{m}$ で深さは約 30cm 。床面はほぼ水平で、柱穴が1つ確認された。また、白磁片も出土している。1号と同様に焼土・炭化物を含み、表土近くは特に多量で固く締まっている。

③ 3号不定形土壇 (SX-03)

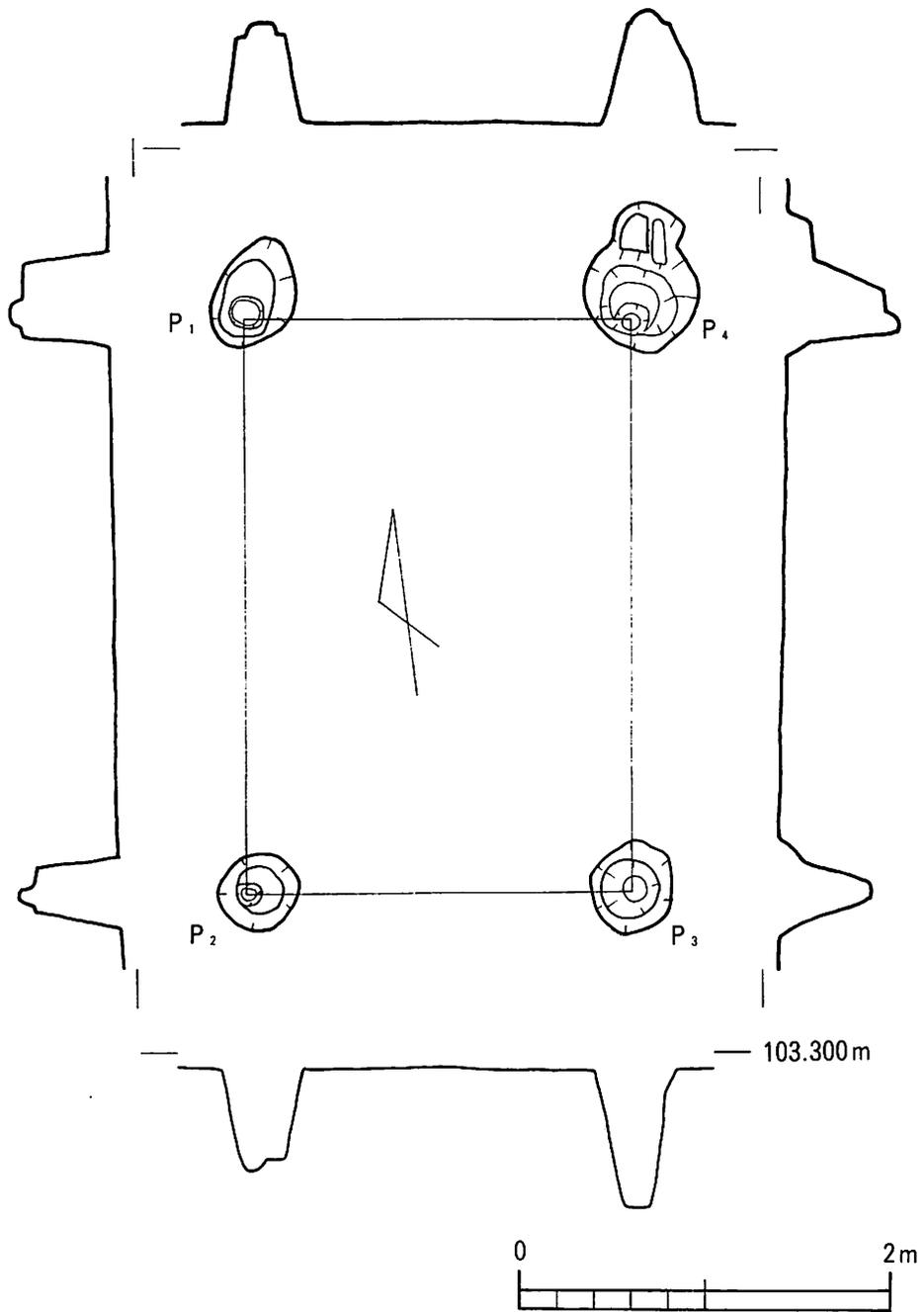
調査区の南端で確認されたもので、約 $3.5 \times 2.1\text{m}$ と大きなものである。床面から多くの柱穴も確認されている。1・2号同様、焼土・炭化物を含み、よく締まっている、土師器片が出土。

④ 4号不定形土壇 (SX-04)

調査区の東端で確認され、調査区外に延びている。約 $1.7 \times 1.4\text{m}$ 、床面はほぼ平坦で柱穴も確認された。また、鉄砲玉も出土。



第6图 1号掘立柱建物跡？実測図



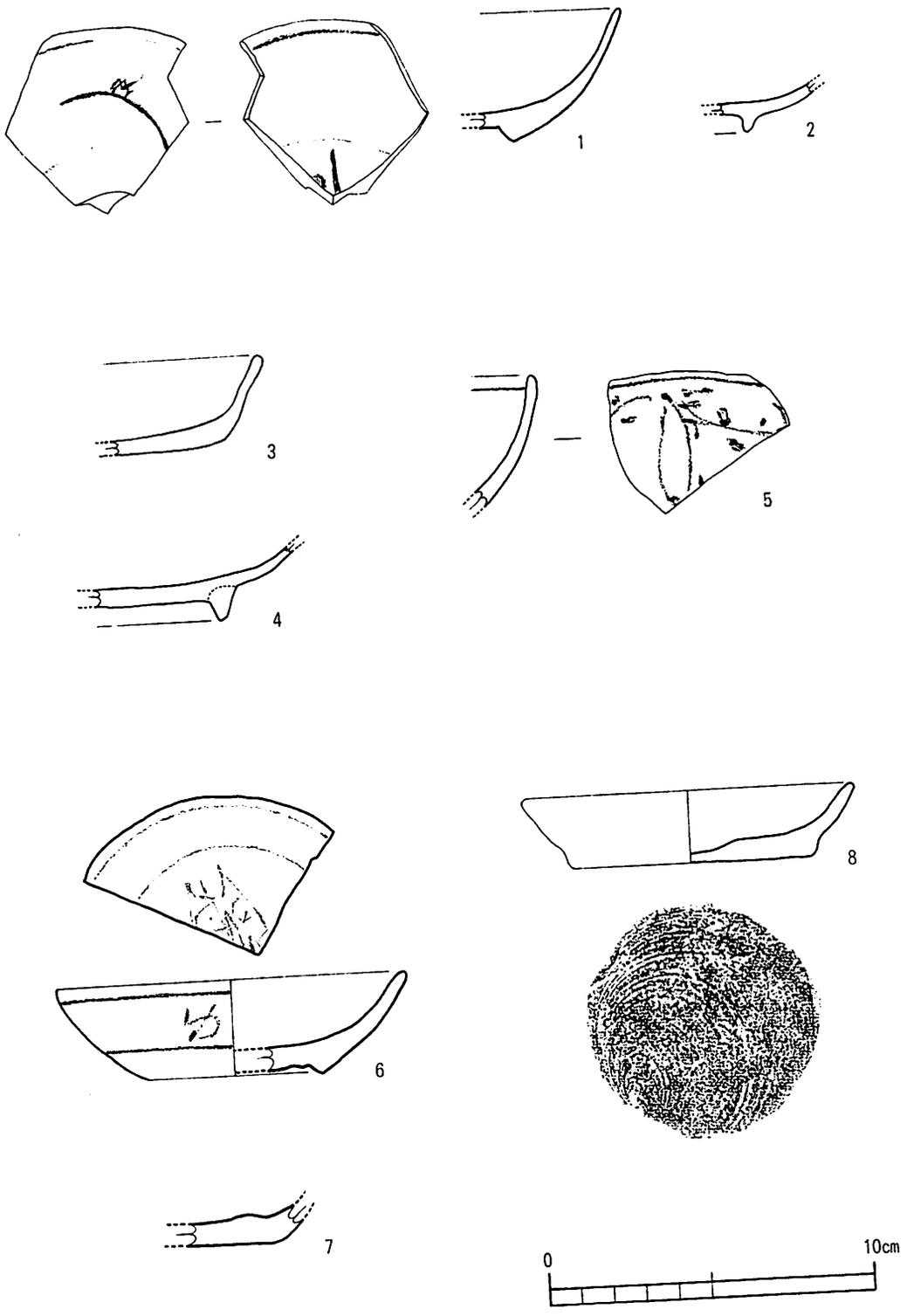
第7図 やぐら跡実測図

2. 出土遺物

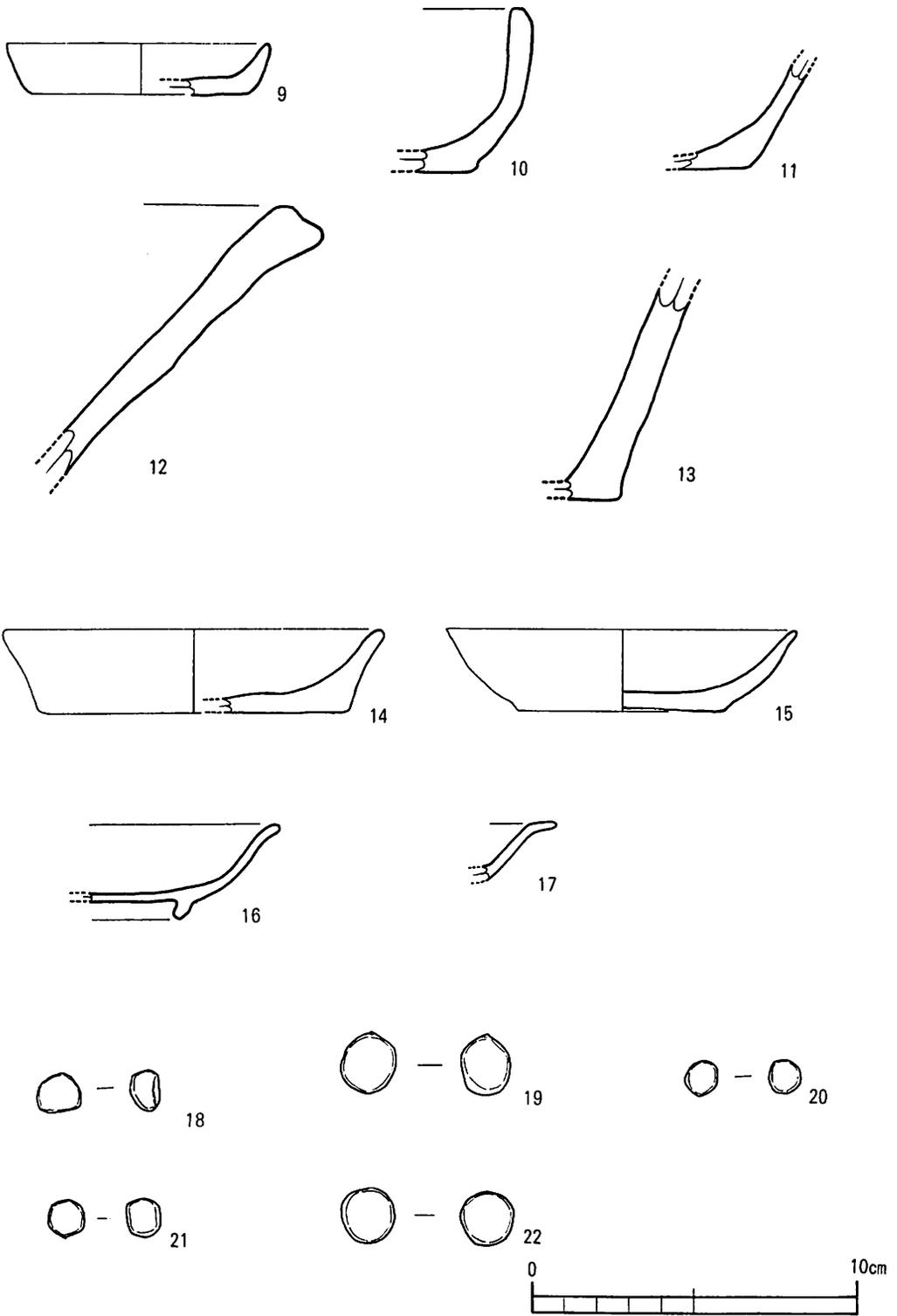
(1) 陶磁器類 (第8・9図)

1～13はI区、14～17はII区から出土。2はSX-01、3～5はIトレンチ、6～8はIIトレンチ、9～13はSK-01の出土である。

1は染付の碗で、やや濁った白色の釉が薄くかけられている。底部から口縁部にかけて、器壁が次第に内弯しながら薄くなっており、全面に細かな貫入が見られる。底部はゴケ高台。外面には細い草に留まっているバツタが描かれている。2は白磁の皿。乳白色の釉が薄くかけられており、内面には茶系が混じる。高台部には焼成の際にできたと思われる気泡が潰れた痕が見られる。タタミ付き部の釉は削りとられている。3は土師器の皿。内・外面とも淡い黄褐色で、細かな砂粒を含んでいる。器壁は底部からやや内弯しながら次第に薄くなり口縁部は丸味を帯びている。4は白磁碗の高台部。やや黄味を帯びた白色の釉が薄くかけられている。焼成の際にできた気泡が潰れた痕跡が多数見られ、釉のかかりが悪かったのか、高台の付根部分にはかかっていない。5は染付の碗。濁った白色の釉が薄くかけられている。口縁部に向かって内弯しながら薄くなっており、外面にははっきりしないが、ぼかした何かが描かれている。6は染付の皿。内・外面とも淡い青白色の釉が薄くかかっており、全面に貫入が入っている。底部から口縁部に向かい、やや内弯している器壁は厚めで、推定口径10.8cm、器高2.9cm。7は土師器の皿。内・外面とも赤味を帯びた褐色で、外面には成形の際にできたと思われる段が見られ、底部から体部への立上り部にも糸切りの際にできたと思われる段がある。口径10.2cm、底径7.2cm、器高2.2cmで糸切底。8も土師器の皿の底部。外面はハケによるヨコナデ調整で糸切底。9も土師器の皿。内・外面とも赤褐色でナデ調整。底部からやや内弯しながら立上り、器厚はあまり変わらず、やや厚め。推定口径8.0cm、器高1.5cm。10は土師器の碗。内・外面ともナデ調整で底部からやや内弯しながら立上り、器厚は厚い。11は土師器の皿。内・外面とも赤褐色。底部から直線的に立上り、外面はヨコナデ、糸切底。12は瓦質のすり鉢の口縁部から体部で、内・外面とも灰色。胎土には径4mmもある石英を含む。外面体部は指頭によるナデ、他はハケによるヨコナデ調整。内面に10本単位の条線が見られる。13は瓦質のすり鉢の底部近く。内・外面とも灰色で、外面は指頭によるナデ調整、内面はよく使い込まれて、かなりすり減っており、条線の単位は不明。14は土師器の皿で内・外面とも淡い赤褐色。底部からやや外弯しながら立上る。推定口径11.4cm、推定底径9.6cm、器高2.6cm。15も土師器の皿。内・外面とも赤褐色で、焼成時の火力が強かったのか、剥落が多く見られる。底部からやや内弯しながら立上る。口径10.7cm、底径6.2cm、器高2.5cm。16は白磁の碗。白色の釉が全面に薄くかけられており、焼成時にできたと思われる小さな穴が多数見られる。底部からやや内弯しながら立上り、口縁部近くでは外反し、口唇部は丸味を帯びる。高台部の釉は削られている。17は白磁の皿。釉は両面とも均一に薄くかけられている。底部か



第8图 出土遺物実測図 I



第9圖 出土遺物実測圖Ⅱ

ら直線的に立上り、口縁部では水平に曲げられている。

(2) 鉄砲玉（第9図）

今年の調査では、直径1.0cm前後で10g以下の小さなものと、直径1.6cm以上で重さも23.0gを越える大きなものの二種類の玉が5個出土した。

18は径1.13～1.31cmと不整形で、何かに当って潰れており厚さは0.825cm。重さは6.0g。19は径1.72～1.83cmで重さは23.7gと大きな部類に入る。20は0.92～0.98cmとほぼ球形で、重さは4.5gと小さい。21も1.05～1.14cmと小さい部類で、重さは7.3g。22は1.63～1.64cmとほぼ球形で、重さは23.5g。

(3) 土錘（第10・11図）

I区から38点（23～60）、II区から9点（61～69）と合計47点の土錘が出土した。

第1表 I区出土土錘計測表

番号	検出遺構	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(cm)	備考
23		3.475	1.810	0.705	10.5	出土遺物番号2
24		4.145	2.055	0.485	15.8	出土遺物番号3
25		4.480	1.645	0.270	11.2	出土遺物番号9
26		4.315	1.680	0.425	11.2	出土遺物番号13
27		3.305	1.095	0.260	3.5	出土遺物番号16
28		4.300	1.150	0.310	5.5	出土遺物番号18
29		(2.855)	0.955	0.205	(2.9)	出土遺物番号19、欠損
30		5.455	1.720	0.490	27.1	出土遺物番号20
31		(2.775)	(1.885)	0.500	(8.2)	出土遺物番号22、欠損
32	SX-01	(3.020)	0.900	0.230	(1.9)	欠損
33	Iトレンチ	(2.590)	(0.920)	0.280	(1.8)	出土遺物番号29、欠損
34	Iトレンチ	4.055	1.600	0.550	9.0	出土遺物番号35
35	Iトレンチ	3.895	1.690	0.480	10.2	出土遺物番号36
36	Iトレンチ	4.445	1.790	0.495	14.2	出土遺物番号39
37	Iトレンチ	(4.390)	1.735	0.410	9.5	出土遺物番号40
38	Iトレンチ	4.050	1.800	0.495	10.6	出土遺物番号41
39	Iトレンチ	(2.300)	0.800	0.225	(1.0)	欠損
40	Iトレンチ	(4.385)	(1.615)	(0.515)	(5.5)	欠損

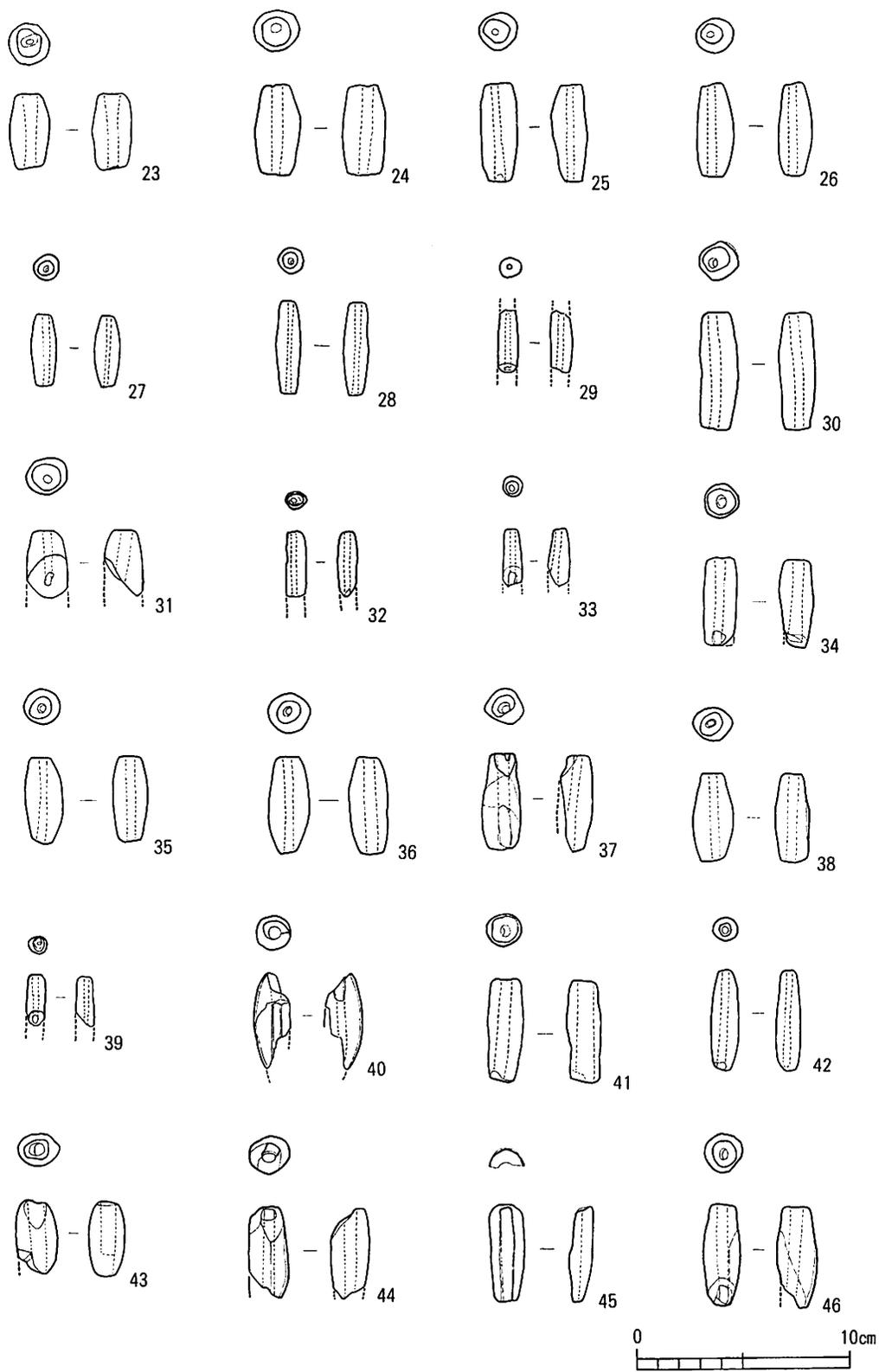
第1表 土錘計測表 I

番号	検出遺構	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(cm)	備 考
41	Ⅱトレンチ	4.755	1.645	0.510	11.7	
42	Ⅱトレンチ	4.675	1.290	0.305	5.7	出土遺物番号46
43	Ⅱトレンチ	3.315	1.880	0.695	(7.7)	出土遺物番号51、一部欠損
44	Ⅱトレンチ	(4.235)	1.790	0.555	(11.2)	出土遺物番号51、一部欠損
45	Ⅱトレンチ	4.410	1.550	(0.340)	(5.2)	出土遺物番号52、半欠
46	Ⅱトレンチ	4.665	1.765	0.575	(11.6)	出土遺物番号54、一部欠損
47		4.565	1.560	0.575	(10.5)	一部欠損
48		4.455	(1.260)	0.500	(5.7)	一部欠損(縦方向にほぼ半欠)
49		4.815	1.810	0.620	15.2	
50		(4,260)	0.985	(0.185)	(3.7)	一部欠損(両端)
51		(4.390)	1.135	0.230	(5.0)	
52		3.430	1.410	0.550	6.4	
53		4.800	1.955	0.535	(17.7)	わずかに欠損
54		(2.590)	(1.350)	0.435	(2.7)	欠損
55		(3.800)	(1.785)	0.545	(8.7)	欠損
56		(2.445)	(1.595)	0.375	(4.8)	欠損
57		4.550	1.625	0.470	(9.7)	一部欠損
58		4.725	1.735	0.570	11.4	
59		(2.985)	(0.942)	(0.280)	(2.5)	欠損
60		(1.560)	(1.455)	(0.520)	(2.4)	欠損

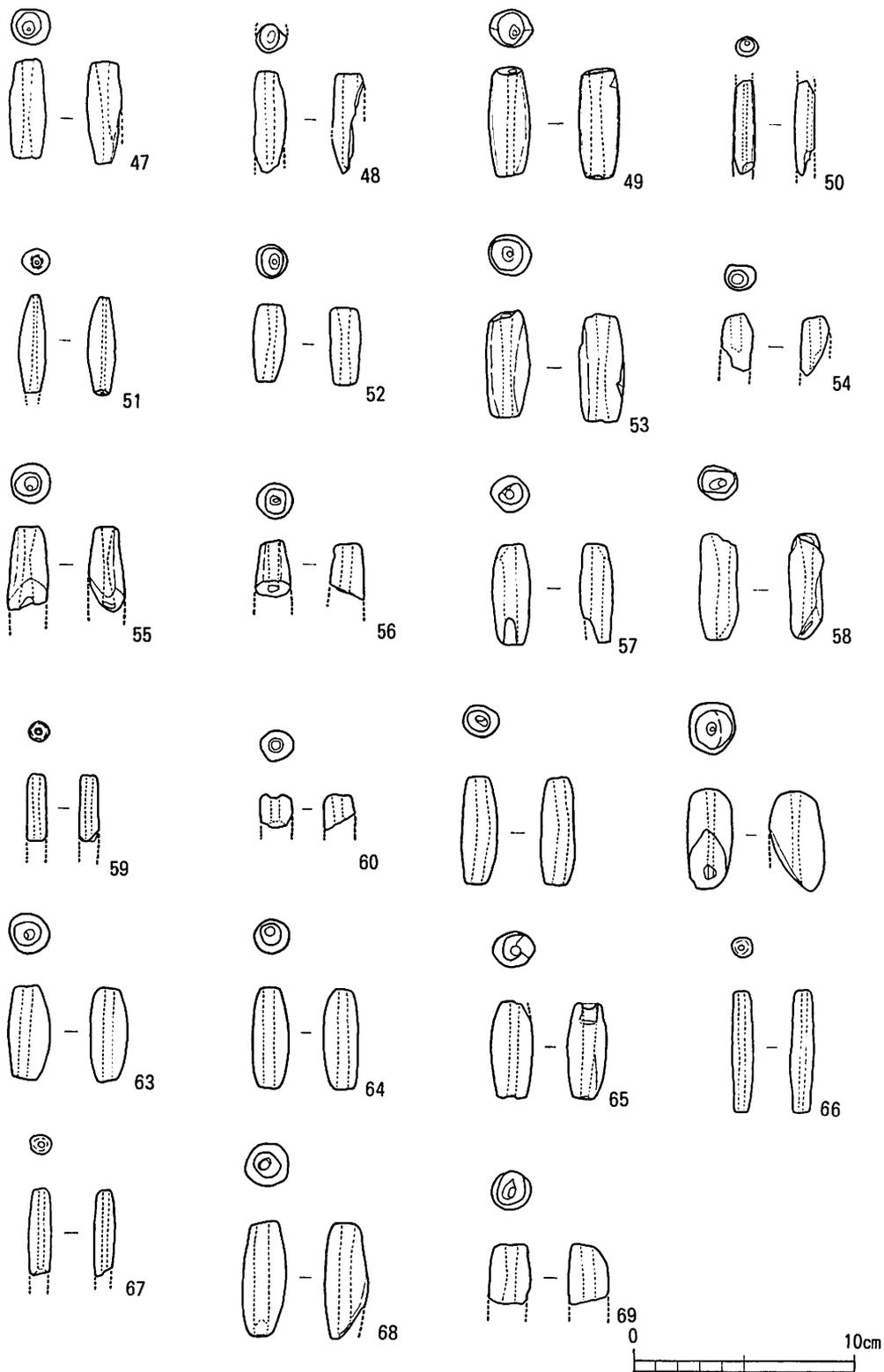
第2表 Ⅱ区出土土錘計測表

番号	検出遺構	長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(cm)	備 考
61		4.875	1.595	0.530	11.0	出土遺物番号12
62		(4.550)	(2.380)	0.445	(20.5)	出土遺物番号17
63		4.225	1.830	0.465	11.3	出土遺物番号18
64	p i t - 1	4.475	1.600	0.425	11.2	
65	p i t - 3	4.260	1.865	0.435	13.7	
66	p i t - 4	5.385	0.965	0.235	4.7	
67	SX-02	(3.840)	0.930	0.210	(4.0)	一部欠損
68	SX-04	5.260	1.935	0.515	16.7	
69	SX-04	(2.720)	(1.985)	0.540	(9.2)	欠損

第1表 土錘計測表Ⅱ



第10图 土壤实测图 I

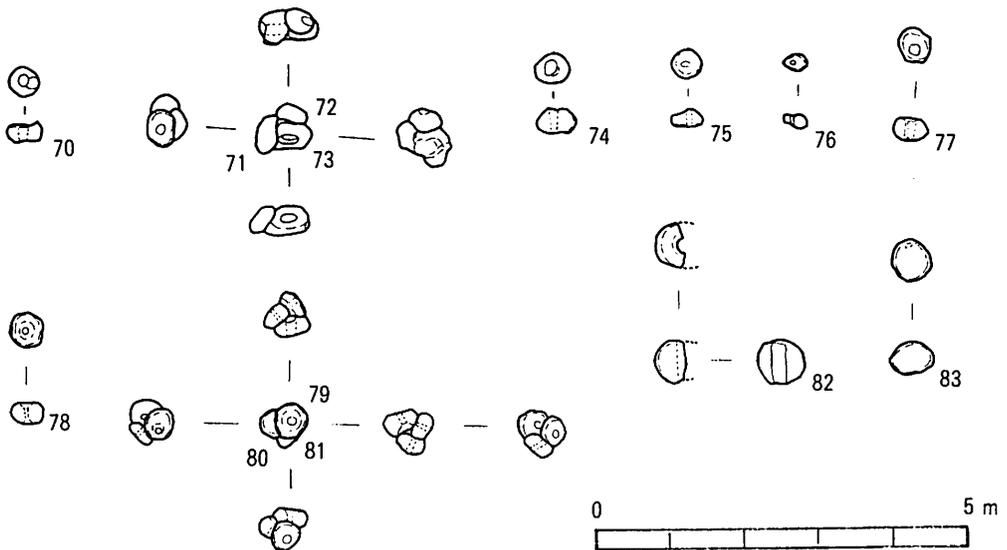


第11図 土錘実測図Ⅱ

(4) ガラス玉 (第12図)

表土剥ぎを終え、遺構確認中に14個のガラス玉が検出された。

70は径4.00~4.15mm、厚さ2.15mm、孔径約1mmでマリンプルー。71~73は熱を受けたためか溶けて付いている状態で検出された。71は径3.65~5.00mm、厚さ2.55mm、孔径1.05~1.55mmで紺色。72は径3.30~3.95mm、厚さ2.35mmでマリンプルーで孔は詰まっている。73は径3.90~4.75mm、厚さ3.05mm、孔径0.80~1.80mmでマリンプルー。74は径3.70~4.15mm、厚さ2.60mm、孔径1.45mmでマリンプルー。孔の開口は広いが、内部にいくにしたがって細くなり、部分的には詰まっている。75は径3.55~3.70mm、厚さ1.95mmでマリンプルー。非常に細い孔が通っている。76は径2.20~3.00mm、厚さ1.80mmと非常に小さく、細い孔が通っており、マリンプルー。77は径4.35~4.60mm、厚さ2.85mm、孔径1.25mmでみどり青色。78は径4.55~4.60mm、厚さ2.50mm、孔径0.90mmであお緑色。79~81も3個が付いた状態で検出された。79は4.25~4.50mm、厚さ2.25mm、孔径1.05mmでみどり青色。80は径3.55~3.90mm、厚さ2.30mm、孔径0.5mmと非常に小さく、みどり青色。81は径3.55~3.80mm、厚さ2.05mm、孔径0.9mmで青みどり色が白けている。82は半分欠けており径5.45~5.90mm、厚さ6.00mm、孔径1.35mmで水色。83は径5.05~5.50mm、厚さ4.00mmで緑色をしており、孔は開けられていない。82と83は他のものと性質が異なるのかもしれない。



第12図 ガラス玉実測図

第三章 ま と め

主郭部の周囲に巡らされている曲輪の調査は、昭和63年度に東側部分を行って以来12年振りとなる。その間、様々な遺構・遺物の発見があり、専門調査委員の先生方の意向により、再び主郭周辺の調査に取りかかることになった。今回、調査を行うこの曲輪は、『辺春・和仁仕寄陣取図』によると辺春氏が陣取りをしていたと思われる箇所にあたると思われる、関連の遺構・遺物の確認が期待された。

調査区は「く」字型に曲っているため、二区画（南部分と東南部分）に分割して調査を行うことにし、今年度は主郭の南側部分を行った。

以前、芝張り整備が行われた際の盛土がガチガチに固まっており、表土剥ぎには苦労したが、表土を剥ぎ終わると、昭和63年度に調査を行った東側部分と同様、地山と造成部分の土色の変化がクッキリと現れた。空堀同様、主郭周囲の曲輪形成の際、大土木工事が行われたことが推測され、田中城築城がかなり大掛りだったことがはっきりしてきた。今回の調査では、柱穴と土壌が確認されたが、柱穴の並びを確認することで今年度調査区外に延びていて確実ではないが、掘立柱建物跡と思われるものが一棟確認されている。また、「やぐら跡」と思われる1間四方の並びも確認された。この「やぐら跡」と思われるものには『辺春・和仁仕寄陣取図』で、空堀に面する急傾斜地の法面の縁に描かれているものに当るのではないかとと思われる。また、柵と思われるものも描かれているが、田中城の柵については、約50～60cm間隔で整然と並んで確認できるため割りと見つけやすいが、今回の調査ではそれらしい並びを確認できなかった。

遺物は、例年同様、青磁・白磁・すり鉢・火鉢・土師器などが出土したが小片が多く、図化できるものは少数であった。鉄砲玉も5個（通算45個）だけだったが、土錘が47点と異常に多く出土した。主郭部からも30点が出土しており、出土状態などを考慮して使用目的、時期などを検討する必要があるようだ。また、ガラスの小玉も14個出土した。径が5mm前後と非常に小さなもので、青系と緑系の二種類に分けられる。古墳時代の玉かとも思われるが、中世の数珠や懸仏などの装飾品とも考えられるということで、今後の発掘調査での関連遺物の出土などが待たれるところである。

今回の調査では、残念ながら辺春氏の陣跡を確実に推定できるような遺構の確認はできなかった。しかし、来年まだ半分の調査が残っているため今年度の調査結果と合わせることで何等かの結果が出せるのではないかとと思われる。豊臣秀吉軍との最期の戦いの際に張られた和仁軍の陣がどのようなものであったかが解明できればと思われる。

写 真 图 版





(1) 調査前状況（北西より）



(2) 調査前状況（南東より）



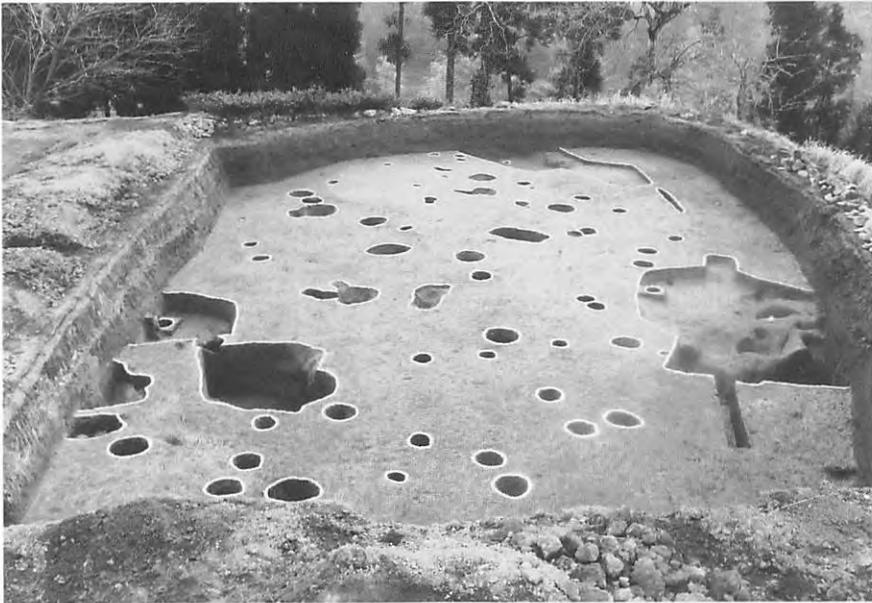
(1) I区遺構検出状況（東より）



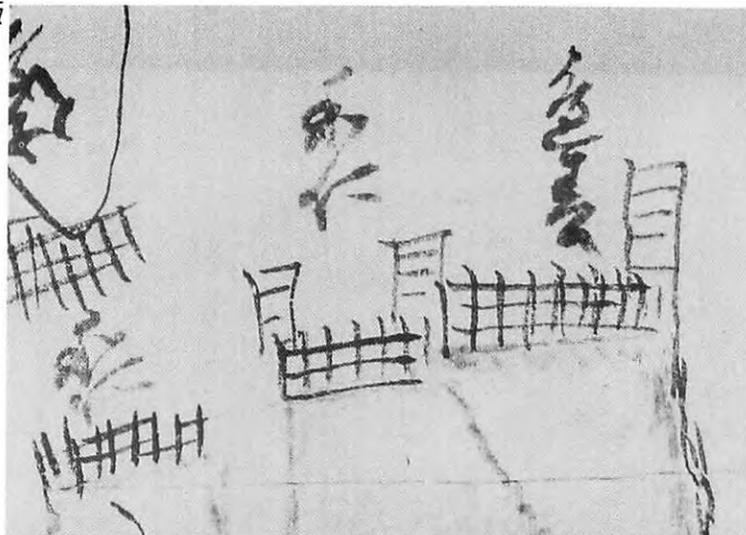
(2) I区遺構発掘状況（東より）



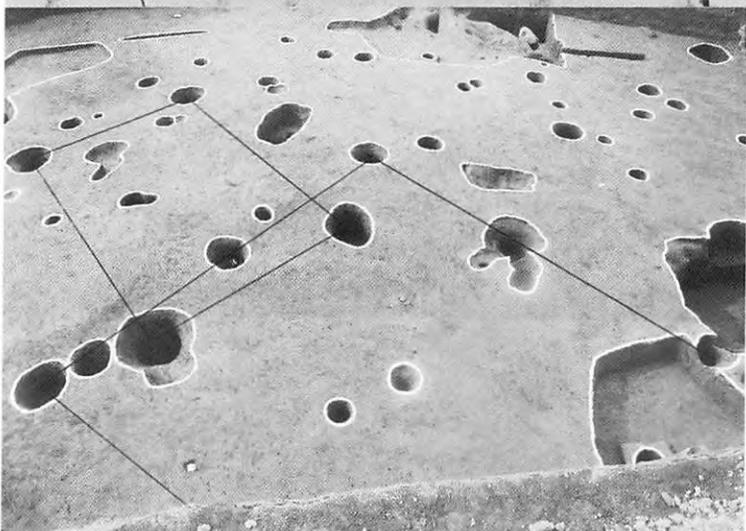
(1) II区遺構検出状況（北西より）



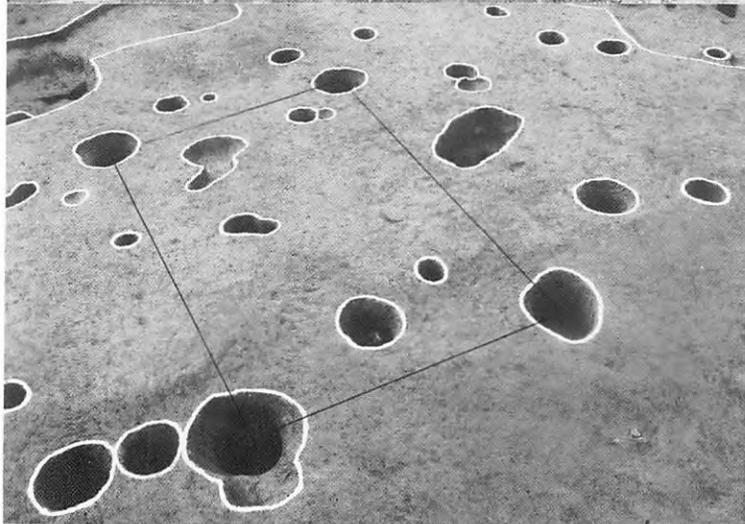
(2) II区遺構発掘状況（北西より）



(1) 「辺春・和仁仕寄陣
取図」部分図



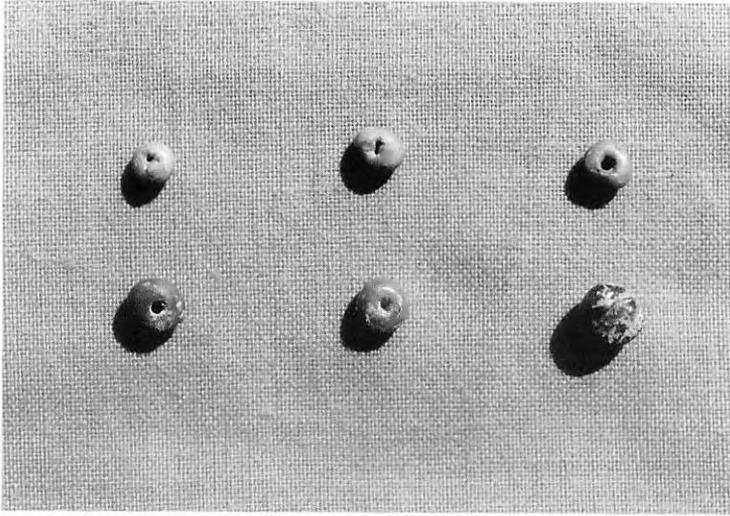
(2) II区建物跡（北より）



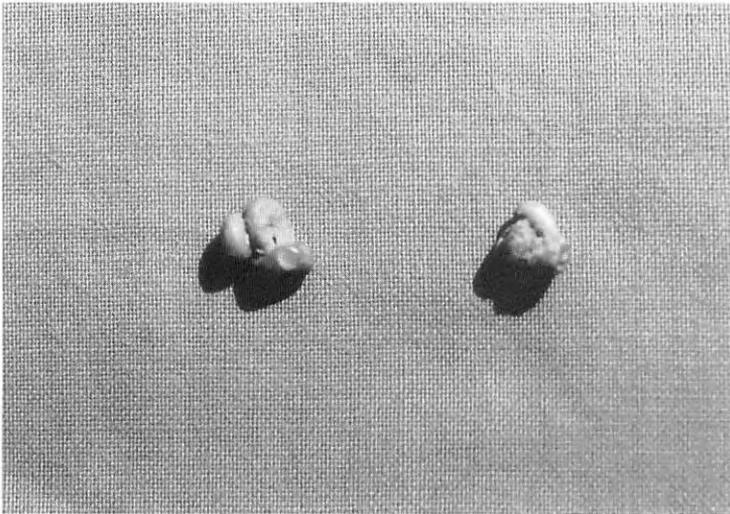
(3) やぐら跡（北より）



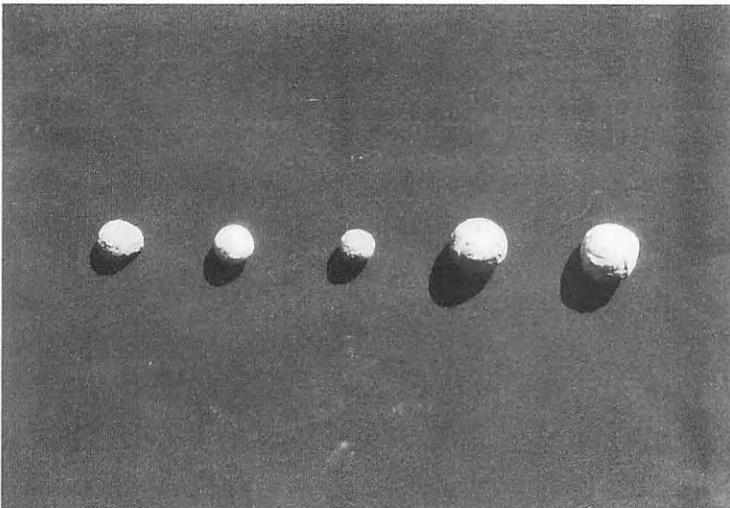
遺物出土状況



(1) ガラス玉



(2) ガラス玉



(3) 鉄砲玉

報 告 書 抄 録

ふりがな	たなかじょうあと							
書名	田中城跡XV							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三加和町文化財調査報告							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	黒田裕司							
編集機関	三加和町教育委員会							
所在地	〒861-0992 熊本県玉名郡三加和町大字板楠76 TEL0968-34-3111 内線55							
発行年月日	西暦 2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たなかじょうあと 田中城跡	くまもとけんたまなぐん 熊本県玉名郡 みかわまちおおあざ 三加和町大字 わにあざふるしろ 和仁字古城	43366		33度 4分 31秒	130度 35分 53秒	199909 ～ 2000031	約900	整備に伴う 範囲および 遺構の事前 確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な異物		特記事項		
田中城跡	城館	戦国時代 末期	掘立柱建物跡？ 1棟・やぐら跡・ 柱穴・土壇 など	青磁・染付・火舎・ すり鉢・土師器な どの小片。 鉛製鉄砲玉 5個 土錘 47個 ガラス玉 14個 など		『辺春・和仁仕寄陣 取図』で辺春氏陣と 推定される箇所に描 かれている「やぐら」 と思われる遺構が確 認された。		

三加和町文化財調査報告書 第16集

田 中 城 跡 XV

2000年3月31日

発 行 三 加 和 町 教 育 委 員 会
〒861-0992

熊本県玉名郡三加和町板楠76

印 刷 熊 本 県 印 刷 セ ン タ ー 協 業 組 合
〒862-8011

熊本市鹿埴瀬町496-1